

## 優秀作品賞

### 「子宮がんと戦った母」

松本 麻里さん

私が二十代、母が五十代の頃だった。マジメな性格の母は、毎年、職場の健康診断を受け、自分の健康管理を怠らなかった。そんな母が、子宮がんの宣告を受けたのは五十五歳の時。

母から、その話を聞いた私は「へ？」と声にならない声が出た。

「へ？おかん、死ぬの？」と心の中で小さくつぶやきながら、何故か咄嗟に「治療すれば治るんでしょ？」と明るく応えていた。今後の治療方法、スケジュールなどをざっくりと聞いたあと、私は自室で泣いた。本当に泣きたかったのは母だったのだと思いながらも、涙が止まらなかった。

それから、子宮摘出の手術まで、自分の輸血用血液をストックするため、通院し採血を繰り返した。母は、感情を表に出さず、淡々と日々を過ごしていた。どんな気持ちでいたのだろうか？

父は、主に平日に母の送り迎えをし、私は仕事帰りに母を見舞う。必要なものを聞き、準備し、弟は土日に加勢。三人とも自分の仕事を持ちながら、家族一丸となつての戦いが始まった。

初めは、「入院用のパジャマを探さなきゃ」などと入院の準備をしていた母だったが、そのうちに「燃えるゴミの日は・・・、」とノートにあれこれと書き出し、自分がいなくなった後のことを心配し始めた。母には治療のことだけを、自分のことだけを考えて欲しがったが、なかなかそうも行かない様子だった。ただただ、私は申し訳無かった。

ある日、「手術時に、A型の血液型の成人男性を二人、待機させてください」と病院から依頼された。母本人の血液のストックだけでは、危険だと言うのだ。私は、自分の職場の男性二人にお願いした。相手が断りづらいお願いをするのは、本当に心苦しかった。もちろん、二人とも快く引き受けてくれた。

子宮摘出手術の前夜、私は母を見舞い、申し訳無さそうに話す母と軽く時間の確認だけをした。帰ろうとパイプ椅子から立ち上がると、母が私を呼び止めて、こういった。

「明日、燃えるゴミの日だから、忘れないでよ！」と。

翌日の午後、私が輸血のお願いをしていた職場の男性二人と病院に到着するとすでに手術は始まっていた。病院の廊下でおしゃべりをしながら、待つこと三時間。看護師さんから、無事に手術が終了をしたことを告げられた。男性二人に

は、またあらためてとお礼を言い、別れた。

ほっとしたのと、何だか分からない感情で、私は動くことができなかった。母の麻酔が切れたあと、父と母の妹である叔母の二人が、主治医の話聞き、母の様子を見て戻ってきた。

「麻里ちゃん、お母さんが心配しとったよ。麻里は？麻里は？って」

うんうん、と頷くだけで私は言葉が出なかった。酸素吸入用のマスクを付けられ、点滴に繋がれている母を見たく無かったからとは言えなかった。父から、お前に申し訳無いと言っていたぞとも聞いた。

もう、「申し訳無い」は十分だ。

手術のあと、辛い抗がん剤治療が始まった。抗がん剤の副作用で、体重は増えたり、逆に何も食べられずに減ったりを繰り返した。本当に苦しそうだった。

ある時、抗がん剤治療の入院中、お見舞いに行くと母が点滴を付けたまま、トイレに行こうと病室を出てきたところだった。私は廊下でその後ろ姿を見かけ、唾を飲み込んだ。その背中、ハンガーにパジャマが掛かっているように見えたのだ。肩の骨がとげとげしくもあった。

元々、身長百五十センチの小柄な母であったが、抗がん剤投与直後は嘔吐を繰り返し、体重三十キロ台まで落ちることもあった。

しかし、たまたま副作用で体重が増加している時に近所の人に会うと「あら？元気で良かった」と声を掛けられた。まだ、副作用のことを知らない人がたくさんいるのだ。

相手も悪気があって言っている訳ではない。説明する気にもなれず、軽く会釈をしてその場を離れるのだった。精神的にも辛いことが多くあった。

また、カツラを取り扱っている小さな美容院を探して、こっそり丸刈りにしてもらったことがあった。美容師さんは、慣れた様子で、「お母さん、頭の形キレイよ。坊主も似合う！」と言ってくれた。応援してくれる人も多かった。

一年ほど抗がん剤治療は続き、終了した。

元々、旅行が好きだった母は、少しずつ出掛けるペースを上げて、普段通りの生活を取り戻した。そして、「二度と行くことは無い」と言っていた海外にも出かけるようになった。

「人生一度きり、いつ死ぬか分からないと言うことを、身をもって知ったのだ」と言った。

その約十年後、孫の顔見たさに私達の赴任先であったベルギーにもやってきた。

あんなに怖がっていた海外旅行のはずなのに、日本への帰国便では、一人ぼっち。空港では不安そうな顔を見せることもあったけれど、孫にお別れを言うと、スタスタと出国ゲートをくぐっていく後ろ姿は、逞しく神々しいものだった。

母は今、がんだったことが嘘であるかのように元気に過ごしている。  
強い精神力で戦い抜き、さらに強くなった母を私は誇りに思っている。